

# 新学習指導要領 歴史的分野 改訂のポイント

愛知教育大学教授 土屋 武志

## 1. 関係性を重視—インフォメーションから インテリジェンスへ

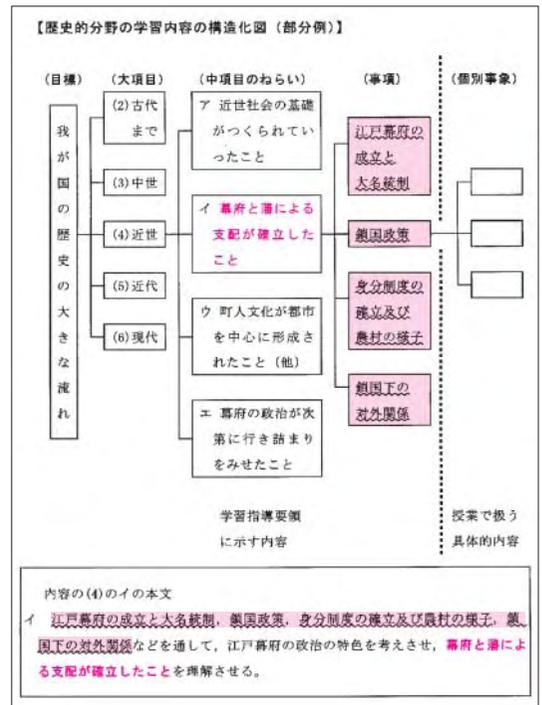
今回の改訂は、外国史の内容が増えただけで基本的には大きな変更はないと思われる方もいるだろう。しかし、内容構造は大きく変更されている。おもなポイントは、次の2点である。

- 1) 事項間の関係性が整理され、羅列型の学習でなく事項相互の関係を重視した高度な理解がめざされた。
- 2) 時代を大きくとらえる能力、つまり歴史を解釈し説明できる能力を育成する視点が明確化された。

この2点について、以下に述べる。なお、近現代史重視であることは今回の改訂でも変わらない。

今回の改訂では、内容部分が「○○を通して、○○を理解させる」という表現に原則的に統一された。その結果、文章の前半部分は、後半部分を理解させるための道具（ツール）という関係が明確になった。たとえば、内容の(2)－イは、「律令国家の確立に至るまでの過程、摂関政治などを通して、大陸の文物や制度を積極的に取り入れながら国家の仕組みが整えられ、その後、天皇や貴族の政治が展開したことを理解させる。」となった。つまり、前半部分に述べられている律令確立過程や摂関政治は、大陸の文物・制度を取り入れて国家の仕組みを整え、天皇や貴族の政治が展開したことを理解するための部品であり、その事項それ自体が最終的な学習課題に

ならないということである。教師は、生徒たちに律令国家や摂関政治の仕組みを学習させることがねらいではなく、後半部分の理解のためにそれらの事項を活用させるという意識を持って指導計画を立てる必要があることが明確化されている。これは、英語でいう「インフォメーション」と「インテリジェンス」の違いを示している。日本では、どちらも「情報」と訳されるが、本来、インテリジェンスは、インフォメーションを評価し、取捨選択し、必要性に即して組み立てたもの、いわゆる「知識（知性）」のことである。社会科歴史学習が、個々の情報を評価し関係づける「関係性の学習」であることが学習指導要領でも明確化された（下図参照）。



平成20年版学習指導要領解説より

なお、今回の改訂で「世界の古代文明」「宗教のおこり」などの学習内容が加わった〔(2)ーア〕。それらも、単にその事項のみ単独で理解させるのではなく、「文明」の共通性や宗教との関係など関係性を重視して学習させることが前提となっている（解説社会編）。

## 2. 「歴史」を解釈する糸口

今回の改訂で、(1)の項目名を「歴史のとらえ方」と変えた。この変化には、二つの要素が背景にある。第一は、社会で一般的な時代区分や年代などを確認する必要性。第二は、年表という歴史を説明するための道具（ツール）を的確に使って時間変化を考え表現させる必要性である。後者は、時代区分や年表が絶対的なものでなく、地域や歴史の見方によって違ってくるといえる。身近な地域の生活史を調べたりすると、政治の視点から見た時代区分と違った時代区分や教科書とは異なる年表がつけられることが多い。「時代区分や年表は歴史学習では大切だが今の尺度が絶対でない」「自分たちが調べたことを年表をつくって説明しよう」などの「歴史」が多様に解釈されるという歴史の基本を学ばせる糸口を与えている。

改訂学習指導要領のこのようなメッセージは、先に紹介した内容の(2)ーイの取り扱いにも示されている。内容の取り扱いでは、「聖徳太子の政治、大化の改新から律令国家の確立に至るまでの過程を、小学校での学習内容を活用して大きくとらえさせるようにすること」とされている。つまり、小学校で行った学習を繰り返すのではなく、それを活用して、時代として大きくとらえる（解釈する）能力を育てるのが中学校社会科歴史学習なのである。この部分は、大きな変化である。

新学習指導要領では、この能力を育てるため、「学習した内容を活用してその時代を大観し表現する活動を通して、各時代の特色をとらえさせる〔(1)ーウ〕」活動が新たに明記された。それは、ドリル的なワークシートの穴埋めでなく、政治や社会・文化など社会を見るいくつかの視点から前の時代と比較し、時代間の共通点や相違点を発見し、生徒が自分の言葉で説明するという活動である（解説社会編）。

## 3. 生きる力の再確認

今回の改訂のもとになっている中教審答申は、PISA型学力を重視している。PISA型学力でいう以下の三つのキーコンペテンシー（主要能力）が、日本でいう「生きる力」のことであるという。

- ①社会・文化的、技術的ツールを相互作用的に活用する力
- ②多様な社会グループにおける人間関係形成能力
- ③自立的に行動する能力

この答申に沿って、中学校社会科では、「社会的事象の意味、意義を解釈する学習や事象の特色や事象間の関連を説明するなど、言語活動にかかわる学習を一層充実することにした」とされている（解説社会編）。中学校社会科で増加した授業時間は、このような能力育成のために使われることになった。単純に一問一答の情報を覚える文字学習でなく、関係性で説明する「能力」育成の学習が一層重視されるようになったといえよう。しかも、このような能力は、生徒一人で学習して身につく能力ではないので、友だちを含め他者との関係性の中で質を高めよう学習活動がより必要になる改訂といえよう。